

太宰治の山岸外史宛の書簡について

近畿大学日本文化研究所

所長 網澤満昭

平成十六年四月十九日のことです。故近畿大学総長・世耕政隆先生の七回忌に際しての「回想・世耕政隆」刊行の件で、私は東京池袋の御自宅にお邪魔することになりました。奥様といろいろと打合わせをさせていただき、失礼しようとしていた時のことです。奥様から古色蒼然としてはいるが、何かずつしりとした重みのある包一つを手渡されました。

「世耕が大切にしていたものです。どうぞお役に立てて下さい。」とのことでした。それが何であるかは知らず、ともかく「確かにお預りさせていただきます」ということで、その紙袋をバックにしまいこみました。

帰途、新幹線「のぞみ」の車中で、恐動しながら紙袋の中を覗きました。中身は太宰治の山岸外史宛の書簡だったのです。自宅にたどりつき、手袋をはめ、一葉一葉丁寧に取り出し、凝視しました。官製葉書が大部分でしたが、絵葉書も何枚ありました。すべてが太宰の山岸宛のもので、八十三葉ありました。時代は昭和九年から十八年までのものです。かなり損傷しているものもありましたが、いずれも文字は判読可能でした。活字になったものでは伝わってこない冗傲や落胆ぶりといった太宰の感情の起伏が感受でき妙な雰囲気巻き込まれました。

二三葉のものであれば、あるいは古書店などでたまたま入手するという僥倖もありましようが、八十三葉という数は、どうもそういう類の入手とは断然違うでしょう。あれこれと憶測してみました。その入手経路を知ろうという姿勢が極めて不遜なことのようにおもえ、それ以後深入りすることを峻拒する気持が私をとらえました。

故世耕総長は太宰がお好きでしたし、その造詣の深さに私は何度も舌を巻いたものです。

お酒の席で「君、俺は太宰の葉書を持っているぞ」とたいそう誇らしげに、しかし小さな声で私に話しかけられ

たことがありました。私はその時のことをおもい出し、「あれだ！あれがこれだったのだ」と納得したのでした。

大変なものをお預りしてしまつたのです。しばらくは驚きと恐怖にとらわれ、誰にもこのことを喋る気になれませんでした。昂揚する気持を沈静化させ、しばらくして故世耕総長の弟さんである世耕弘昭理事長にこの件を報告し、現物をお見せしました。理事長は「兄がその葉書を手に入れていたことは知っていた」とのことで、「いろいろと大いに役立てて欲しい」との御助言をいただいた次第です。

「書簡集」として出版すべきだと一瞬思いましたが、それではすでに筑摩書房の『太宰治全集』のなかの「書簡集」に、この八十三葉は掲載されていますので、筑摩のものをいくつか訂正し得たとしても、それほどの意味はなようにおもえませんでした。これは太宰の文字そのものを「写真集」にすべきだとおもつたのでした。

世耕理事長にこの話をしましたところ、「兄もきつと喜んでくれるとおもう、企画してみてくれ」との快諾をいただきました。早速、故総長の奥様の了承を得、津島家、山岸家の御遺族にもこの件に関する承諾をいただき、また、筑摩書房にも礼儀として報告しておきました。尚、太宰治研究の第一人者である山内祥史先生から、ご多忙中にもかかわらず、本書刊行の意義を簡潔にかつ具体的に説かれた御文章をいただき、その上お誉めの言葉まで頂戴したことは、望外の喜びであります。

ここに出版社翰林書房の御支援御協力を得て、『太宰治・山岸外史書簡写真集』を刊行するはこびとなつたのです。編集責任者は、近畿大学文芸学部教授の浅野洋氏、同じく佐藤秀明氏です。

この出版によりまして太宰治、山岸外史を中心とした近代日本文学、文化研究にながしかの貢献が出来ればと願っています。

尚この写真集発刊費用に関しましては近畿大学に全面的な支援をいただきました。

平成十八年二月十日